

AFCフォーラム

第10回日本・中国・韓国における国史たちの対話の可能性

「国史のなかの『感情』—日本・中国・韓国—

主催：渥美国際交流財団関口グローバル研究会（SGRA）

共催：東北学院大学

2026年8月26日（水）9：00～12：30**2026年8月27日（木）9：00～12：30****於・東北学院大学五橋キャンパス**

日本語、中国語、韓国語の同時通訳付き

趣 旨

「国史たちの対話」の目的は、日中韓それぞれの自国史研究者が対話し交流を深めることにより、知のプラットフォームを構築し、東アジアの国際関係をしばしば紛糾させてきた歴史認識問題を克服するための手掛かりを得ることにある。2016年から対話を重ねてきた「国史たちの対話」は今回で第10回となり、また10周年を迎える。

今回は日中韓の国史における「感情」をテーマに取り上げる。人々の感情は、明らかに歴史を動かす要因となってきた。そして歴史認識もまた、感情という要素を抜きにしては理解できないものである。

日中韓は、歴史をめぐる国民感情レベルでの衝突を何度も経験してきた。グローバル化の進展やインターネットメディアが社会を大きく変えつつある中、今後もそうした事態がなくなるとは考えにくい。そこで、「感情」それ自体を対話の焦点とするのは有効と考えられる。日中韓の国民はお互いにどのような感情を抱いてきたのだろうか。戦争や植民地支配という過去の出来事は、日中韓の国民感情にどのようなインパクトを与えてきたのだろうか。

「感情」はしばしば「理性」と対比されるが、このような捉え方には留保する必要がある。自己を理性的とみなす者は、立場や意見が異なる者の言動や異議申し立てを感情的だと捉えがちである。しかし現実には、感情と理性とを明確に区別することは困難である。

感情というテーマ設定は、2023年の第8回国史対話「20世紀の戦争・植民地支配と和解はどのように語られてきたのか」の成果を踏まえたものでもある。この対話では、歴史認識がそれぞれの社会で記憶や学校教育、メディアを通じて形成されるものであり、歴史研究とは大きなギャップがあることが改めて確認できた。深刻なテーマにもかかわらず、日中韓の自国史研究者の間には驚くほど深い対話が生まれたが、それだけでは十分でないことも明らかになった。第10回となる今回の国史対話を通じて目指すのは、日中韓の自国史研究者が相手の国の「感情」を知るとともに、自国の「感情」をも知ることである。このような観点から対話をさらに深め、歴史認識問題に向き合う上での大きなヒントが見出されることを期待する。

プログラム

2026年8月26日（水）

第1セッション 【基調講演】

司会：金 キョンテ KIM Kyongtae（全南大学）

9：00 【開会趣旨】

劉 傑 LIU Jie（早稲田大学）

【基調講演】「感情・歴史およびアイデンティティ」

—北東アジアの歴史叙述における国民偏見をいかに緩和するか—

葛 兆光 GE Zhaoguang（復旦大学）

本講演で北東アジア（中国・日本・韓国）に関わるいくつかの歴史的事件および歴史著作を事例として、次の三つの問題について考察する。第一に、異なる国民的感情がいかに歴史叙述を左右し、その結果として歴史叙述にどのような偏りが生じてきたのか。第二に、歴史の中でこれらの感情をいかに共感的に理解し、それらを理性的な歴史叙述の中にどのように適切に位置づけることができるのか。第三に、国境を越えて歴史叙述の視野を拡大し、「帰属意識」あるいは「アイデンティティ」と呼びうる感情的要素を相対化することで、歴史における「彼我の境界」が生み出してきた隔たりをいかに乗り越えることができるのかを考察する。

【フォーラムの趣旨】

塩出 浩之 SHIODE Hiroyuki（京都大学）

【基調講演】「義憤の感情体制(emotional regime)—茶山 丁若鏞の『義殺論』」

金 澔 KIM Ho（ソウル大学）

18世紀、朝鮮王朝を統治した正祖は、「すべての人間は天から明るい本性〔明德〕を授かった」という朱子の教えに基づき、『万人の君子化』を統治の究極的な目標とした。以前は両班や士族にのみ求められていた「明明徳の修身」が、可能な限りすべての民に認められ、人生の目標として提示された。誰もが君子になる可能性は持っているが、誰もが君子になるわけではない。無論、社会が求める「義」を行えば、天から授かった君子の可能性を現実に実現することができる。不義に立ち向かったり、憤ったりする「義—しばしば暴力を伴う」は、正祖の感情統治において、重要な「管理の対象」であった。25年の治世の間に正祖が残した千件を超える殺人事件の「審理の記録〔審理録〕」は、正祖の感情統治の内実を示す思想史の資料である。それだけでなく、正祖の『審理録』に対する茶山丁若鏞の批評書〔欽欽新書〕は、18世紀から19世紀にかけての韓国の心性史（mentalité）を理解する重要な鍵である。

10：30 休憩（30分）

第2セッション 【発表「戦争と感情」】

司会：南 基正 NAM Kijeong（ソウル大学）

11:00 【発表1】「軍事暴力と感情の統制」

中村 江里 NAKAMURA Eri（上智大学）

日本の侵略で始まった日中戦争、アジア・太平洋戦争は、日本の植民地となった朝鮮・台湾の人々も含め、国内外に多数の犠牲者を生み出した。それだけではなく、生き延びた人々にも心身の後遺症を残した。本報告では、このような巨大な暴力の主体となった日本軍を、感情史研究者のバーバラ・ローゼンワインが概念化した「感情共同体（emotional community）」として捉え直し、兵士たちの感情がいかに統制され、彼らが共有する感情表現の規範はどのようなものであったかを論じる。

また、日本軍兵士たちが戦場における暴力に加担していくプロセスを考える上でも、感情麻痺や「敵」との感情的な距離は重要である。感情を鈍麻させることで非人間的な残虐行為が可能となった兵士たちは、復員後、戦後の日本社会をどのように生きたのだろうか。この点も含め、本報告では感情統制がもたらした負の影響についても考察する。

【発表2】「戦争の感情と国家の自己再構築—韓中日における承認闘争の比較研究」

吳 承燾 OH Seung-he（国立外交院）

韓中日の歴史的葛藤は、単なる事実をめぐる争いではなく、戦時の苦痛に対する承認がなされないまま現在に至るなかで、国家間関係を規定し続ける承認闘争である。本研究は、ホネットの承認理論を分析の枠組みとして、各国が戦争の感情的遺産をいかにして現在の国家的自己再構築の企てへと転換しているかを考察する。各国は異なる感情変換のパターンを示す。日本においては、戦時の加害に対する罪責感と敗戦の恥辱を被害のナラティブに置き換えることで封印し、抑圧されたトラウマは歴史修正主義と「強い日本」への渴望として再び浮上する。韓国では、植民地支配の屈辱を脱植民地的な自己確立へと転換し、「韓流」が全世界的に獲得した承認を通じて集団の尊厳を回復する。中国は、「百年の屈辱」を中華文明の復興と「中国の夢」へと昇華させ、人類運命共同体の言説を通じて、承認を求める国家から代替的世界秩序を提案する文明主体へと自らを再定位する。

これら競合する自己企画は衝突しつつ、東アジアの承認政治の地形を新たに形成している。本研究は、東アジアにおける和解が歴史的事実の解決だけでは実現しえず、他者の苦痛を真に受け止めるにはまず各国が確かな自己承認を築かなければならないという逆説こそが、この地域の未完の歴史的清算の核心にあることを提示する。

【発表3】「苦難・抵抗・超克：抗日戦争記憶をめぐる三つの叙事とその省察」

唐 小兵 TANG Xiaobing（華東師範大学）

本報告は、主として新世紀以降に刊行された回憶録およびオーラルヒストリーを基礎資料とし、苦難を経験した個人たちの叙事、日本の侵略に対する文化的志向をもつ抵抗の叙事、そして民族国家の境界を超える歴史的省察という三つの次元から、抗日戦争をめぐる歴史叙事の三類型を再検討するものである。個々人の生命の物語および生命の経験という視角を通して、中国の知識人、学生、民衆がいかに抗日戦争に起因する集合的経験と民族的トラウマを体験し、目撃し、かつ省察してきたのかを明らかにする。さらに、個人と国家、歴史と記憶、経験と理性、ナショナリズムとヒューマニズムといった複数の視座から、これら回顧録およびオーラルヒストリーが提示する内容について検討を加えることを目的とする。

2026年8月27日（木）

第3セッション 【発表「相互イメージ」】

司会：鄭 淳一 CHONG Soonil（高麗大学）

9:00 **【発表4】 「近代日本の対中国感情—『文明／野蛮』『清潔／不潔』という枠組み」****金山 泰志 KANAYAMA Yasuyuki（横浜市立大学）**

本報告は、近代日本における対中国感情の形成と変容を、「文明／野蛮」「清潔／不潔」という二項対立の枠組みから検討する。近年、日本人の対中印象は否定的評価が9割を超えるとの調査もあり、SNS上では排外的言説が日常的に拡散している。こうした現在の感情を歴史的に相対化するため、知識人や国策レベルの中国観研究が扱いにくかった民衆の、より直接的で無意識的な「感情」に光を当てる。分析①では、明治から昭和戦前期までの主要な少年雑誌（『小国民』『少年世界』『日本少年』『少年倶楽部』）を史料に、戦争・外交の局面に応じて敵意・侮蔑が増幅される一方、孔孟など古典世界の中国偉人への敬愛も併存するという両義性を通史的に示す。少年雑誌が娯楽であると同時に感情教育の媒体であり、子どもに共有可能な「最大公約数」の感情構造を伝達した点に注目する。分析②では生活文化として中国料理受容を取り上げ、「不潔」評価が味覚や衛生の問題に還元できず、中国人や南京町など中国的空間への先入観と結びつき再生産された過程を論じる。さらに、19世紀後半の衛生思想の浸透が「清潔＝文明」を強化し、日本の自己定位と他者化を支えたことを示し、感情史の視角が現代の日中関係をより冷静に、かつ多声的に語るための基盤となることを提起する。生成過程を可視化して示す。

【発表5】 「現代韓国の中国認識：歴史機関と国政監査、政治の波動」**孫 成旭 SON Sungwook（昌原大学）**

韓国の対中感情は、単一の起源を持たない。その底流をなしているのは、前近代の朝貢秩序における中華優位の経験、近代日本の植民地支配が残したヒエラルキーの経験、冷戦期のイデオロギー的敵対である。しかし、今日の感情はこうした歴史的形成過程だけでは説明できない。対外情勢の変化と国内政治の再編が繰り返し波動を引き起こし、歴史的に蓄積されてきた感情を再び呼び起こして新たな形に作り替えるからである。

この過程において、韓国の対中感情と対日感情は互いに連動している。両者は完全に独立して動くわけではなく、特定の局面ではシーソーゲームのように連動する傾向を見せる。反日感情が高まる局面では中国が歴史的連帯の対象として呼び出され、反中感情が強まる局面では日本との関係が改めて見直されることがある。こうした連動は偶然というよりも、韓国社会が前近代の中国優位と近代の日本優位という異なるヒエラルキーの経験を同時に抱えつつ克服してきた過程が、感情構造の中に刻み込まれた結果である。

本稿は、韓国の対中感情がいかに制度化され、政治の波動の中でいかに増幅・調整されるかに注目する。分析の中心に据えるのは、2006年に設立された東北亜歴史財団である。国史編纂委員会、韓国学中央研究院、独立記念館などが研究・収集・教育を本分とするのに対し、東北亜歴史財団は当初から研究機関であると同時に、当面の課題に対応する機関として設計された。21世紀初頭、中国の東北工程と日本の歴史教科書問題が同時に噴出し、この危機をめぐる政治力学がこの機関を誕生させた。その結果、財団は外交・政策・世論の接点に位置し、政治の波動にひととき敏感に反応する構造を持つこととなった。

本稿は、財団をめぐる国政監査資料を主要な分析対象とする。国政監査は、政治が歴史機関を呼び出す方式であり、歴史感情が政治言語として表出される場面である。いかなる争点がいかなる言語で表出されるか、対中議題と対日議題の比重が政権や時期によってどのように変化するか、歪曲・屈辱・憤怒といったネガティブな感情語彙がいかなる政治的条件の下で前景化するかを追跡する。さらに、そうした言語が財団の研究課題と事業の優先順位を経て、大衆の歴史認識にいかなる波紋を生むかを考察する。これを通じて、政治が歴史機関に及ぼす影響とその問題を再検討したい。

10:30 休憩（30分）

第4セッション 【指定討論と自由討論】

11:00

モデレーター：彭浩 PENG Hao (大阪公立大学)、村和明 MURA Kazuaki (東京大学)

- 【指定討論1】 朴三憲 PARK Sam hun (建国大学)
【指定討論2】 宮間純一 MIYAMA Junichi (中央大学)
【指定討論3】 王継洲 WANG Jizhou (西南政法大学)
【指定討論4】 馮淼 FENG Miao (中国社会科学院)

【自由討論】

【総括】

三谷博 MITANI Hiroshi (東京大学名誉教授)

12:30 閉会

登壇者紹介



葛兆光 (かつちょうこう) / GE Zhaoguang

1950年生まれ、北京大学卒業(1982年)、同大学院修了(1984年)。清華大学教授を経て(1992年)、復旦大学文史研究院の創設院長に就任(2007年)。

現職は、復旦大学文史研究院および歴史学系の文系上級教授。

専門分野は東アジアおよび中国の思想・文化・宗教史。

主な著作：『中国思想史』(全2巻、復旦大学出版社、1998・2001年、英語版・韓国語版あり)、『中国は“中国”なのか：「宅兹中国」のイメージと現実』(中華書局、2011年、英語版・韓国語版・日本語版・仏語版あり)、『完本 中国再考 領域・民族・文化』(香港オックスフォード大学出版社、2014年、日本語版・英語版・仏語版あり)、『歴史中国の内と外』(香港中文大学出版社、2017年、韓国語版・独語版あり)など。



金滌 (キム ホ) / KIM Ho

ソウル大学国史学科を卒業後、同大学院で修士号および博士号を取得。ソウル大学奎章閣韓国学研究院責任研究員、京仁教育大学教授を経て、現職。

現職は、ソウル大学アジア研究所教授。

専門分野は朝鮮時代の知性史および社会文化史。主に朝鮮王朝の統治論と制度的実践の盛衰を探究している。

主な著作：『許浚の東医宝鑑研究』(2000年)をはじめ、『朝鮮王室の医療文化』(2017年)、『朝鮮の地方医局：公共の実践場』(2025年)など医療社会史の研究や、罪と罰をめぐる朝鮮の日常世界を研究した『丁若鏞、朝鮮の正義を語る』(2013年)、『100年前の殺人事件：検案を通じて見た朝鮮の日常史』(2018年)、そして『正祖の法治』(2020年)など。



中村 江里 (なかむら えり) / NAKAMURA Eri

1982年生まれ。上智大学文学部史学科を卒業後、一橋大学大学院で修士号及び博士号取得(社会学)。一橋大学大学院社会学研究科特任講師、日本学術振興会特別研究員PD、広島大学大学院人間社会科学研究科准教授を経て、2024年4月より現職。

現職は、上智大学文学部史学科准教授。

専門分野は日本近現代史、軍隊と精神医療の社会史、ジェンダー史。

主著に『戦争とトラウマ』(吉川弘文館、2018年)、『戦争と文化的トラウマ』(共著、日本評論社、2023年)、“Male Hysteria in Modern Japan: Trauma, Masculinity, and Military Psychiatry during the Asia-Pacific War” in Traumatic Pasts in Asia edited by Mark S.Micale and Hans Pols (New York: Berghahn Books, 2021)、「『社会的苦しみ』としての戦争トラウマ」『BRAIN and NERVE』75巻9号、2023年など。

**吳 承燾 (オ スンヒ) / OH Seunghee**

2006年梨花女子大学政治外交学科学士。2010年梨花女子大学大学院東アジア学科修士。
2016年 梨花女子大学大学院政治外交学科博士課程修了。政治学博士。

現職は、国立外交院外交安保研究所助教授。

専門分野は日本外交政策、中日関係、東アジア国際関係。

主な著作：『東アジアの承認闘争——敗戦国日本・分断国家中国・植民地朝鮮の国交正常化』ソウル大学出版文化院（2023年）、"From the Only A-Bombed Country to Global Peace Advocate: Japan's Diplomatic Identity Change in the Struggle for Recognition" The Korean Journal of International Studies 22-2 (Scopus, 2024.8)、『戦後中日関係70年——毛沢東・吉田期から習近平・安倍期まで』梨花女子大学出版文化院（共著、2019年）

**唐 小兵 (とう しょうへい) / TANG Xiaobing**

湖南省出身。歴史学系教授。1997年から2001年まで湖南大学人文社会科学系新聞学専攻にて学士課程を修め、2003年から2009年まで華東師範大学歴史学系にて修士・博士課程を修了。

現職は、華東師範大学教授・博士課程指導教員。ハーバード大学燕京学社訪問研究員を経て、オンライン教育プラットフォームAPP「看理想」の音声講義「回憶録の中の20世紀中国」の講師を務める。2014年、『東方歴史評論』による「中国傑出若手歴史学者」に選出、華東師範大学第1回若手教師育人貢献賞などを受賞。

専門分野は清末から民国初期の新聞・雑誌史、現代中国の知識人および思想文化史、左翼文化と中国革命、回憶録・オーラルヒストリーと20世紀中国史など。

主な著作：『裂け目の中を歩む：知識人と20世紀中国』（香港中文大学出版社、2025年）などがあり、『中共党史研究』、『新聞與伝播研究』、『史林』、『読書』、『二十一世紀』（香港）、『思想』（台北）などに、特集論文および学術書評を含む30篇以上の論考を発表している。

**金山 泰志 (かなやま やすゆき) / KANAYAMA Yasuyuki**

2007年横浜市立大学国際文化学部卒業。2009年日本大学大学院文学研究科日本史専攻博士前期課程修了。2013年日本大学大学院文学研究科日本史専攻博士後期課程修了。博士（文学）。

現職は、横浜市立大学国際教養学部准教授。

専門分野は日本近代史、メディア史。

主な著作：『明治期日本における民衆の中国観』（芙蓉書房、2014年）、『近代日本の対中国感情』（中公新書、2025年）、「近代日本の中国料理受容と対中感情」（『日本史研究』719号、2022年7月）

**孫 成旭 (ソン ソンウク) / SON Sungwook**

2005年檀国大学史学科学士。2009年北京大學歴史学系修士。2015年北京大學歴史学系博士。歴史学博士。

現職は、国立昌原大学史学科副教授。

専門分野は中国近現代史、韓中関係史。

主な著作：『使臣に従い清に行く』（プルンヨクサ、2020年）、『北京に来た西洋人、朝鮮と出会う』（東北亜歴史財団、2022年）、「“盛極又衰”の円明園——朝鮮使臣の円明園経験を中心に」『清史研究』2015年第1期、「清鮮関係における清朝礼制の緊張——康熙年間の清朝による朝鮮王世弟冊封を中心に」『文史哲』2018年第5期、「‘外交’の亀裂と模索：1860～70年代 清・朝関係」（韓国）『歴史学報』240、2018年。「20世紀‘宗藩関係’論の形成と変容」（韓国）『東洋史学研究』164、2023年。

**朴 三憲(パク サムホン) / PARK samhun**

1995年高麗大学日語日文学科 学士。2000年神戸大学大学院日本史専攻修士。2003年神戸大学大学院日本社会文化史専攻博士課程修了。文学博士。

現職は、建国大学日語教育学科教授、建国大学常虚記念図書館館長、常虚教養大学学部長。

専門分野は日本近代史。

主な著書：『天皇そして国民と臣民の間』、RHK, 2016. A New Modern History of East Asia(Co-authored), Vandenhoeck & Ruprecht GmbH & Co, 2017年、『新・未来をひらく歴史』(共著)、高文研、2025年

**宮間 純一(みやま じゅんいち) / MIYAMA Junichi**

2005年中央大学文学部史学科日本史学専攻卒業。2007年中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士前期課程修了。2012年中央大学大学院文学研究科日本史学専攻博士後期課程修了。博士(史学)。

現職は、中央大学文学部教授。

専門分野は日本近代史、政治史・地域史。

主な著作：『明治維新という物語—政府が創る「国史」と地域の「記憶」』(中央公論新社、2025年)、『戊辰内乱期の社会—「佐幕」と「勤王」のあいだ』(思文閣出版、2015年)、『国葬の成立—明治国家と「功臣」の死』(勉誠出版、2015年)

**王 継洲(おう けいしゅう) / WANG Jizhou**

2011年、曲阜師範大学杏壇学院日本語専攻にて学士課程を修了。2014年、西南政法大学法律修士学院にて法律修士学位を取得。2015年、広島修道大学法学研究科にて法学修士学位を取得(二つの修士学位を取得)。2021年、早稲田大学社会科学研究科博士後期課程を修了し、社会科学博士の学位を取得。

現職は、西南政法大学政治・公共管理学院講師、国際関係教育研究室副主任、重慶都市ガバナンス・発展研究院副研究員。

専門分野は日本政治思想史、日中関係など。

主な著作：「蠟山政道の政治外交論」(『日本歴史』第917号、2024年10月)、「赤松克麿の政治外交論」(『政治経済史学』第663号、2024年3月)、「蠟山政道と「東亜協同体」—知識人と政治との距離」(『アジア文明』第3輯、上海人民出版社、2025年)など。

**馮 淼(ふう ひょう) / FENG Miao**

2003年に中国人民大学歴史学系にて学士号を取得。2013年にニューヨーク大学にて哲学博士を取得。

現職は、中国社会科学院近代史研究所副研究員。

専門分野は中国近現代史、革命および戦争の社会文化史。

主な著作：論文「〈読書生活〉と1930年代上海における都市革命文化の発展」(『文学評論』2019年第4期)、「トランスナショナルな視野から見た中国農村問題—太平洋国際学会を中心とする考察」(『開放時代』2024年第4期)、単著『近代中国における大衆教育の興起 1927-1937』(社会科学文献出版社、2023年)など。